

ホームステイの英語力への効果 (III)

The Effect of Homestay Experience in the United States on the Participants' English Proficiency (III)

(1991年4月3日受理)

沼本 健二 黒田 ディアナ 上斗 晶代
Kenji Numoto DeAnna Kuroda Akiyo Joto
北川 歳昭 福森 護
Toshiaki Kitagawa Mamoru Fukumori

Key words: ホームステイ Homestay, 英語教育 English Education
英語力 English Proficiency/Competence

Abstract

We have found that the homestay students tend to be slightly more improved in listening comprehension and the knowledge of conversational expressions than non-homestay students.

This paper aims to determine whether there is any relationship between the results of JACET Basic Listening Comprehension Test and those of the questionnaires concerning home-stay students' self-estimation of their English ability, their attitude toward learning the language, and their "international-mindedness." It also attempts to list reasons for the differences in homestay student participation in conversation. It therefore is concerned with the creating of a vocabulary to cover communicative features which are essentially the same features developed for creativity tests of divergent thinking abilities. The final aim is to compare high school homestay students with junior high school homestay students, based on the questionnaire.

I. はじめに

上斗他 (1989), 沼本他 (1990) は, 語学研修を目的としたホームステイ前後において, 参加者の英語力に有意な向上を認めている。有意な向上は, 聴解力と会話表現の知識の二分野において現れた。また, 参加者はそれぞれに, 帰国後の学生生活においても, 積極的な取り組みをみせており, ホームステイが, 短期間ながら, 大きな影響を与えているものと考えられる。

北川 (1989) は, 一方, ホームステイ効果の心理的側面に注目し, 意識調査を実施している。それによると, 参加者は, アメリカ人のイメージにおいて, 肯定的な方向へ有意な変化を示し, 外国人への接近および受容的態度において, 有意に積極的になっている。同様の報告に渡辺 (1979) と樋口他 (1982) がある。前者は, 中・高校生参加者が, 帰国後, 英語学習意欲を増しただけでなく, アメリカ人に対し

て好感を持つようになったことを報告しており、後者は、短大生の価値意識やカナダ人のイメージに変化が現れたことを明らかにしている。

本稿では、(1) 英語学力に現れた有意な向上と参加者に対して実施したアンケート調査をクロス分析することにより、英語学力と種々の面で現れたホームステイ効果の間に、何らかの相関関係が認められるかどうか、(2) 参加者の伝達能力に現れる特徴が、オーラル・テストの結果から判別できるかどうか、さらに、(3) 短大生と高校生の間に、ホームステイ体験の受け止め方の相違が認められるかどうか、について調べる。

II. 聴解力の向上と心理的要因との関係

ホームステイ参加者の聴解力の向上と心理的発達の側面に現れた変化が、いずれも有意なものであることが実証されたが、聴解力の向上がいかなる要因によっているものかは判然としない。ここでは、参加者の心理的な側面のみ焦点を当てて調べる。

1. 方 法

聴解力に現れた有意な向上と「国際意識に関するアンケート調査」との間に相関が認められるかどうか、を調べるために、1989年7～8月に実施されたホームステイの参加者を含む集団を対象に、次のテストとアンケート調査を実施した。実施時期は次のとおりである。

1) 「JACET英語基礎聴解力標準テスト (Basic)」

実施時期：第1回 1989年5月中旬 (ホームステイ出発2ヶ月前)
第2回 1989年11月下旬 (帰国後3ヶ月)

2) 「英語力テスト」

実施時期：第1回 1989年7月初旬 (ホームステイ出発直前)
第2回 1989年9月中旬 (帰国後1ヶ月)

3) 「国際意識に関するアンケート調査」

実施時期：第1回 1989年6月下旬
第2回 1989年9月初旬

「英語力テスト」の結果、ホームステイ参加者グループ (以下、HSG) は、会話表現の知識と総合得点において、5%の水準で有意に向上し、聴解力においても向上が認められたが、不参加者のグループ (以下、N-HSG) には上昇傾向は見られなかった。「JACET英語基礎聴解力標準テスト (Basic)」 (以下、JBLCT) においては、HSGは1%の水準で有意に向上しているが、N-HSGには有意差は現れなかった。この有意差は参加者のいかなる側面に起因しているのだろうか。

「国際意識に関するアンケート調査」 (以下、国際意識調査) は、ホームステイ効果の心理的側面を明らかにしようとしたものであるが、それによると、HSGは、N-HSGに比べ、「アメリカ人のイメージ」において有意に肯定的な方向に変化し、「外国人への接近および受容的態度」において有意に積極的になっており、「英会話能力に対する自己評価」も有意に高めている。

以上の結果より、参加者は、比較的短期間の異文化接触からではあるが、聴解力と心理的側面の両面において影響を受けていることが分かる。そこで、聴解力に現れた向上が、心理的側面において有意な

変化が認められたどの因子と関係が深いか、を調べるために重回帰分析を行った。目的変数にはJBLCTの結果を用い、説明変数には、「アメリカ人のイメージ」「行動・性格に対する自己評価」「アメリカへの関心」「外国人への接近および受容的態度」「英会話能力に対する自己評価」の5変数を選んで用いた。分析の対象は、テストとアンケート調査を受けた30名である。

2. 結果と考察

表1は、各変数の基礎統計量を示したものである。表2は、JBLCTの得点を目的変数とし、上記の5変数を説明変数とする重回帰分析の結果得られた、各説明変数の回帰係数と偏相関係数を示す。重相関係数は0.509であった。この結果から、ホームステイ中に生じたと考えられる聴解力の向上は、参加者の5つの項目からなる心理的要因とそれほど大きな関係があるとは言えないまでも、その関係を否定しきれないものであることが分かる。

さらに、偏相関係数を見ると、「外国人への接近および受容的態度」が比較的数値が高く、5つの要因の中では、聴解力との係わりが強いことが分かる。この項目は、外国人との具体的な接触の場面を仮想させ、その際の態度の積極さを計るものであり、高得点の参加者が、ホストファミリーや研修指導者と積極的に交わったことが想像できる。

しかし、「行動・性格に対する自己評価」は負の相関を示し、結果は意外であった。「行動・性格に対する自己評価」は、だれとでも話す、あまり遠慮しない、自分に自信がある、などの、人の行動や性格を表す項目につき自己観察させ、7段階評定法によって数値化したものであり、英語の習得を助ける要因であると考えたからである。これらの項目については、小項目の設定の仕方やスコアリングの方法に

表1 基礎統計量

変 量	平 均	分 散	標準偏差
JBLCT得点	49.067	95.789	9.787
アメリカ人のイメージ	22.500	11.293	3.361
行動・性格に対する自己評価	19.767	9.702	3.115
アメリカへの関心	24.000	17.241	4.152
外国人への接近および受容的態度	10.400	1.972	1.404
英会話能力に対する自己評価	4.600	2.869	1.694

表2 回帰係数・偏相関係数

変 量	回 帰 係 数	偏 相 関 係 数
アメリカ人のイメージ	-0.21344	-0.07668
行動・性格に対する自己評価	-1.28931	-0.38044
アメリカへの関心	0.37683	0.16145
外国人への接近および受容的態度	2.07442	0.30241
英会話能力に対する自己評価	0.80732	0.13522

重相関係数=0.508673

ついて検討する必要がある。

また、JBLCTの9月と7月の差を目的変数とした重回帰分析の結果、重相関係数は0.402であった。伸び率の方が、心理的要因との相関が低いことになる。偏相関係数を見ると、「英会話能力に対する自己評価」の値がもっとも高く、伸び率との相関は、他の変数よりも高い。この結果から、数値は低いものの、参加者が実感として感じる英会話能力の伸びは、聴解力の向上にわずかながら反映されていると言えよう。

III. 聴解力の向上とホームステイ参加者の姿勢

上記の試みは、聴解力の向上を心理的要因から説明しようとしたものである。ここでは、参加者がどのようにホームステイを受け止め、英語習得にどのように取り組み、英語力をどのように評価しているか、という観点から実施したアンケート調査の結果から、聴解力の向上が説明できるかどうか、について調べることにする。

1. 方 法

ホームステイ参加を決意してから異文化体験終了後までの、参加者の参加の動機、英語力への自信の変化、英語学習に対する積極性、ホームステイ効果の自己評価、などを調べるために、次のアンケート調査を実施した。

1) 「ホームステイに関するアンケート調査」

実施時期：1989年9月

調査対象：岡山市内某高等学校1年生 92名

中国短期大学英语英文科学生 42名

この中から、JBLCTを受験した本学学生30名を対象として、重回帰分析を行った。目的変数には、JBLCTの得点を用い、説明変数には、上記アンケート調査の中から、「動機の強さ」「英語力に対する自信」「英語使用・授業への積極性」「英語運用の困難度」「英語力伸長度自己評価」の5変数を選んで用いた。英語力に関する変数は、聞く力と話す力に関する回答に限って数値化したものである。

2. 結果と考察

表3は、各変数の基礎統計量を示したものである。表4は、JBLCTの得点を目的変数とし、上記の5変数を説明変数とする重回帰分析の結果得られた、各説明変数の回帰係数と偏相関係数を示す。重相関係数は0.212であった。この結果から、聴解力に現れた有意な向上は、参加者の英語力や英語学習に対する自己評価では、ほとんど説明できないことが分かった。むしろ、心理的要因の方が関係が深いようである。次に、偏相関係数を見ると、全体に数値は低いが、「英語力に対する自信」が5変数の中でもっとも高い。このことは、英語運用に自信を持って参加したり、次第に自信を深めていった参加者の方が、英語使用の機会をたくさん持ち、その能力を高めるであろう、という予測と一致する。また、この結果は、心理的要因の中では、「英会話能力に対する自己評価」が聴解力の向上との相関が一番高かったことと符合する。しかし、「英語運用の困難度」は、負の値を示している。この変数は、「聞く力」と「話す力」について、それぞれ5段階評定法によって自己評価したものの合計から取ったもので、全く困難を

表3 基礎統計量

変 量	平 均	分 散	標準偏差
JBLCT得点	49.067	95.789	9.787
動機の強さ	5.267	1.995	1.413
英語力に対する自信	5.567	0.875	0.935
英語使用・授業への積極性	8.333	4.920	2.218
英語運用の困難度	5.300	1.321	1.149
英語力伸長度自己評価	6.033	3.137	1.771

表4 回帰係数・偏相関係数

変 量	回 帰 係 数	偏 相 関 係 数
動機の強さ	-0.04792	-0.00607
英語力に対する自信	1.63464	0.14954
英語使用・授業への積極性	0.40526	0.07823
英語運用の困難度	-0.99460	-0.11236
英語力伸長度自己評価	-0.49773	-0.08648

重相関係数=0.212415

感じなかった者に最高の10点を与えている。従って、負の相関が出たことにより、困難を感じなかった者が積極的に英語を使用しようとしたとは限らないし、英語を話したり聞いたりする能力に優れているとも限らないことがわかる。

IV. The Oral Test :

Teaching students to say what you want to hear ...

1 Abstract

Communicative language acquisition consists of the manipulation and transformation of the most disparate linguistic abilities: grammatical competence, discourse competence, sociolinguistic competence. It is dependent on pronunciation which is the vocalization and imitation of sound.

At each step of competence there is a creative opportunity at one of the disparate points. These creative opportunities tend to cause stress which creates physical tensions, poor pronunciation, memory loss, hesitation and retrogression to elementary linguistic forms and low levels of action.

Creative crisis can be eased with such props as friends, the memo, and the use of multiple textbooks. Teaching practice with tapes includes how to control voices, bodies, materials, partners

and a group in order to obtain a sample which is ratable with sustained production and creativity.

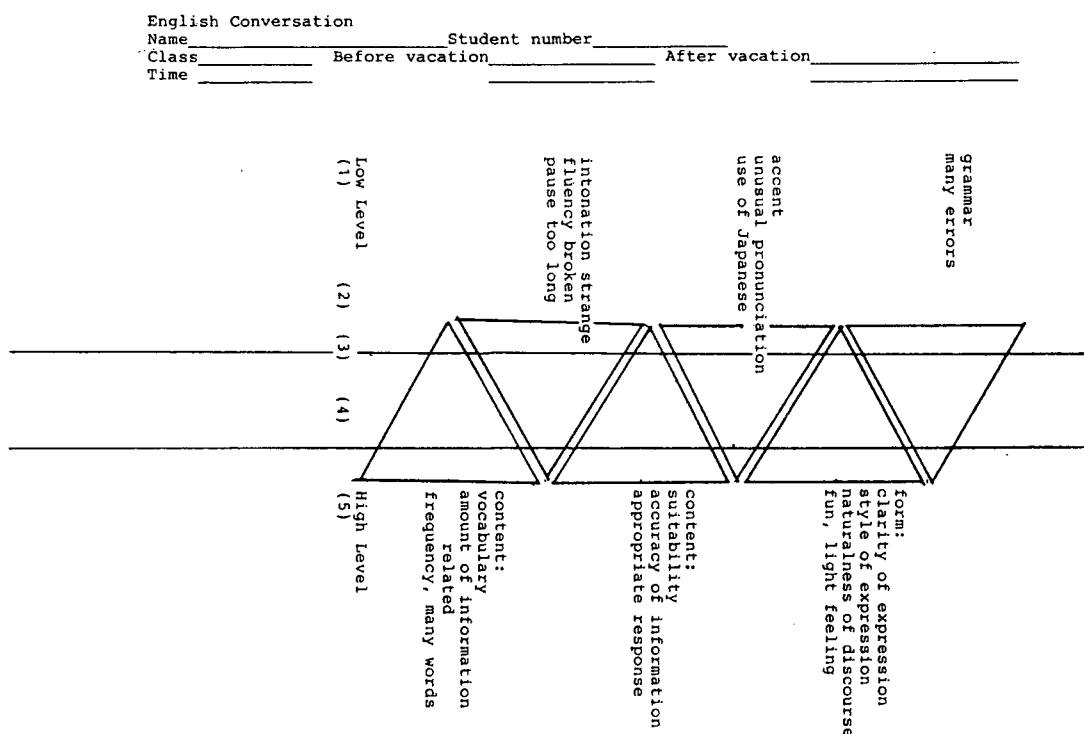
2 Test Purpose

The focus of this chapter is a study on an EFL oral interview and a subsequent questioning of communicative ideas and classroom study to prepare the students for further testing.

The need for evaluation of the homestay experience provided the initial thought of trial tests in tasks of communication, emphasizing language with the purpose of conveying information. The test's main emphasis was on open-ended, spontaneous responses as well as hearing, sound-pronunciation differentiation and an awareness of expressions. Listening comprehension, reading and pictures were the catalysts for taped oral production. To communicate, the students were to provide some words, sentences and groups of sentences; each student having some information he wanted to share with a listener, both having a choice with a real task. Interest, quick action, real topics, real time and for the better ones real language were the aim. Because of the tester expectation variances and the actual test environment new ways for learning communicative divergency had to be made.

A further area of interest was a grammar and content relation to communicative skills and a scale and list of items were devised to check these.

Fig. 5 Marking Criteria-Schemes



Although we were looking for communication, divergent thinking, and spontaneous answers, an objective test with a choice of grammar-based answers was also used.

3 Results

Japanese put great faith in the concept of meet-a-foreigner and to a large extent have built the homestay program into a big business. Since this experience of travel, however, is only of short duration the measurable differences in conversational achievement is likely to be small but changes do occur in attitude, internationalness and listening skills as well. It was our intention to find some differences in English attainment in the “before” and “after”.

What you expected. What he did. What he would do later. The Subjects!

The students used were all in the English department of a small junior college in a country area, with very few of them having had foreign teachers or travel. They were from middle-class country-urban Japanese families of rather mixed social backgrounds. In all, 130 students, eighteen to twenty, were tested and a wide ability range was present.

Summer vacation was spent by the subjects, then, with two types of activities, one in California with the homestay program and the other in Japan being Japanese. When the tapes were listened to it was soon found that the quantity of spontaneous output was too small to measure as was planned. Novice sometimes meant nothing at all.

Disregarding test design because many items had been considered in great detail, the course of action was to find some reasons for the unratableness while definite improvement was being seen in class. As an alternative to reading more books brainstorming was used. When ideas seemed to be exhausted there was clear indication that the innovativeness of language learning was in direct line with the first space venture—which wasn't American. The IQ test was quickly changed to find people with greater potential in a call for creative scientists. What happened then we are just realizing in the open-ended answer. Before, IQ tests had spontaneous answers but these were changed to a choice of some items which made it faster to mark but also created a test of the divergent ability. Thus, communicative language techniques are creativity test components. In the past students were challenged with IQ test preparation built into textbooks and lectures. Now students are faced with the challenge of creativity-divergent thinking preparation built into textbooks and lectures. There is the supposition that both IQ and creativity can improve with learning meaning that the world is for those who get a chance to be learned.

Every task then is a consideration of convergent or divergent ability. What has been seen in our students is a blending of these aspects of thought at low proficiency or high tension; and most likely this is also true at low IQ, in the beginner, in writing as well as in speaking. This being true, if it be true, such sensitivity as stage fright, avoidance and stress has changed the spontaneous flexibility to appear to be completely absent in the tape samples because this demand for original ideas lowered fluency.

4 Communicate Ideas to Others—Think/Test/Communicate

Communicative learning is concerned with ideas vs mechanical manipulation. Visualizing to compose or think of a new approach; understanding cause and effect, making a summary or drawing a picture under certain circumstances; knowing ideas and vocabulary to make lists, checking the best or defining in a new way; not to mention telling the facts from the opinions or asking if it will work and judging the quality and then challenging the statement are all much different from who, when, what, where and why questions.

The memo began with a reversed cloze passage where the deleted words were used instead. At times words were given with the request of a simple story, at other times students were given the whole task of finding words and telling a story. This method resulted in an independence of approach but if they wrote sentences they didn't attend to the problem and didn't gain in proficiency. The students using only words in an ordered list began to speak and sustained production could be measured. This memo can bring in details from life and their textbooks such as verb tense, proper names and dates as well as establish a basis for a formal outline and then be a form of self-evaluation through self-need. Using a memo the students became more efficient with their preparation in role play situations as well as in their individual attempts to finish a story. It was also found that students took a shorter time to read, find ideas and respond with summarizing to academic passages found in current oral reading tests.

5 Knowledge is a full moon...

Listening to tapes is a very time consuming and physically taxing experience. Plus, global interest doesn't encourage a student to speak out adventurously nor a teacher to be innovative. Listening was done with a small cassette player and earphone and then with a headset but both methods made clear the LL equipment company warnings that twenty minutes at one time is the maximum one can endure with headset devices and concentrated listening. Stiff joints, sensitive spots at the contact points and a ravenous appetite ensued. Listening in while tapes are being made, research, impression marking to spot-check such items as pronunciation and grammar is perhaps all a teacher can be expected to manage.

Using tapes with a memo won't be discontinued since any encouragement at sustained production is important because spontaneous thus creative improvement endures. In the latter part of a sample more creative and good ideas are found in the advanced student even if the low proficiency student retrogresses to reproducing a dialogue from a textbook to fill the time limit. The student takes notes and makes a record of what is on the tape. There is a deadline and a certain amount due at a deadline creates the test feeling of timed execution and special places for the production of deliberate material on a variety of problems on tapes from books, pictures and friends. It is positively a fact that spontaneous answers make the many foundations for retrogression.

Because some students feel more at ease in a test when they bring small memos and a lot of belongings while sitting as closely as possible to their friends, this has been built into the lessons and

of course the tests. In addition, since the actual test is a set time, as much time as needed can be used to prepare. The response though original must be a part of reality, of some amount, intending to alter, introduce, change or evaluate. Creative tests ask not new solutions alone but problems, endings for fables, the finding of hidden shapes to single out the important, word definitions and redefinitions, and the uses of an object in a new light; all of which can be moralistic, humorous or sad.

Highly creative and intelligent students can work quickly, happily and can appear to be having fun with their friends and not working as hard as some others. This playing around has suggested games. When we enjoy thinking and learning, this looking like fun-and-games, we all should play; many things being learned through friends, creatively, more efficiently than by being taught. Although referred to as games, game-like structure with task order can be used by teachers to manipulate students. A game includes such features as dominance, self-control, need to win, time pressure, playfulness, complexity, disorder into order and the bizarre, all of which can be more simply arranged among friends. Self-rating, self-actualization and communication with others provide for confidence. Friends.

6 A Collection of Impression Marking Observations

Unfortunately a few homestay students have experienced some disappointments, frustrations and shock at being made aware of their own abilities and achievements and seem to be discouraged and unable to grow in English. They have become the “I-can’t-speak-student.” The problems seem to be ones of shyness, low-proficiency, reticence, quietness, anxiety, subdued manner, culture shock, caution, inability to relate and express experiences and a general failure to contribute to the communicational exchange. Other homestay returnees, strangely, have become satisfied with their own success and show little desire to learn new language and are happy to remain at a low level of proficiency.

It is with great pleasure that we have watched the growth of most homestay returnees whose work is easily distinguished from that of other students. They have a zeal that makes them work, uninfluenced by their classmates. They show a lack of anxiety about nonconformist responses, outcome, mode of expression and vocalization.

Looking into the student homestay reports and English achievement, the homestay experience shows many positive features of communicative language teaching theories: +humanistic +informal +task-oriented +learner-centered relevance +communicatively based real language including: explanations, clarifications, rules, tasks, elicitation, listener—listening, different but definite ideas, unrehearsed exchanges, and visualizing—images. These lucky students are encouraged to reach out, adjust to certain standards and then create their own standards.

Returnees closely identify themselves with English materials, textbooks and movies. Such an attitude is essential because the content relates to the communicative expression of their personal experiences. Their human spirit, thinking and emotions become one in unlimited qualities or within

a restricted boundary or in relationships of different significance. Within each, this multiple of events becomes one. This oneness is the connection to the not yet; the not yet found, heard of, seen, formed, or learned communication, which is the original response. This ability to produce creatively is the main difference between speaker and nonspeaker, and obviously, man and animal.

Homestay students learn to be creative in verbal, visual, associative, ideational and expressional areas. They display independence of judgement, approach, thought and action. They work unsupervised with self-initiated learning, taking-over, organizing and questioning. There is a sensitivity to problems, attitudes, interpersonal relationships and a critical awareness with some rebelliousness and exhibitionism. Most important is a tolerance of ambiguity, acceptance of uncertainty, a have-a-go ease, making of openings, taking risks and seeking wide categories. Originality, diversity, variety, quantity with quality, insight, novelty, altering of ideas, freedom of expression or interests, spontaneous responses, producing surprise and smiles make it pleasant in class. Certainly, creative communicativeness, fluency, rhythm, hesitation, number and speed, complexity of syntax, appropriateness, correctness, expression, word choice, fit, vocabulary, pronunciation, sound differentiation, style and structure confirm their ability to manipulate language with elaboration and flexibility

Along with creativity it is the aspect of persistence that homestay returnees possess. This persistence leads to a stability in their level of expression. This stability of repetition allows the student to repeat language with limited error and retrogression.

Finally when homestay students faced their own experiences and found their own ideas to be of value they could take responsibility for what they were doing. They developed the self-confidence to think, to test, and to seek the establishment of communication with others. They enjoyed consciously being a part of the group. This belongingness led to self-identification and cooperation. An identity with others grew into empathy; I and someone else sharing an emotional, spatial relationship. This openness to experience grew into leadership with objectivity. The wonderful result is intellectual growth and the desire to go ahead. To learn.

V. 「ホームステイに関するアンケート調査」からみた高校生と短大生の差異

ホームステイとは、一般に、異文化、異言語社会の中で、個人の家庭に一定期間滞在して、日常生活を通じて文化や生活習慣または言語を学ぶことをいう。母語の話せない状況下に身をおいてのホームステイは、友人の家にさえ泊まったことのない高校生や短大生にとって、一般に言われているほど安易なものではないと思われる。しかし、実際に、参加者がどのようにホームステイを受け止めているかは、参加者自身から聞き出すのがよいであろう。この目的のために、アンケート調査を実施した。その内容は、主として、英語学習や英語力に関する質問からなる。実施要領は前項の通りである (p. 230)。

調査対象の高校生は、4年制大学進学を目指す高校一年生である。中学校での英語学習では、ほとんど困難を経験していないと考えてよい。また、その39.1%に当る36名は男子である。以上のことに注意しながら、どのような動機で参加し、どのような態度で滞在先の人々に接し、ホームステイ効果をどのように評価しているかについて、比較的差異の大きい項目を中心に検討する。

1. ホームステイ参加の動機と態度

動機は、大きく分けて2つある。一つは英語力に関係し、もう一つは異文化への関心である。この分け方でいくと、高校生と短大生のいずれもほぼ同じ傾向を示しており、約30%が前者を、70%弱が後者を、参加の動機としている。しかし、細項目をみると、「ホームステイした国や、その人々に対する関心」を第1の動機とした者は、高校生の方が57%であったのに対し、短大生は42.9%であった。また、「海外に行ってみたかった」と答えた者は、高校生で10.9%、短大生が23.8%であった。高校生の方が、新鮮な気持ちで、積極的に参加しているように思える。

このことは、出発前の学習状況にも現れている。短大生の場合、ホームステイを意識して、授業以外に多少なりとも学習に力を入れた者は、「聞く力」で65%強、もっとも低い「書く力」で30%であった。このことは、一般の学生と比較すると、ホームステイ参加が刺激となっていることをしめすものであると思う。しかし、高校生の場合、「聞く力」の習得に多少なりとも力を入れた者は65%強で、短大生とほぼ同じ傾向を示しているが、「書く力」では40%強であった。また、「かなり力を入れた」とする者は、各分野とも、高校生の数字が短大生を上回っている。この数字からみる限り、高校生の方が、しっかりした目的意識を持ってホームステイに備えているといえよう。あるいは、高校生の方が英語学習の不足を強く意識している、と考えるべきかもしれない。さらに、ホストファミリーやその他の人々に対する態度、ホームステイ中の授業の宿題への取り組み方にも、両者の姿勢にかなりの相違が認められる。

「授業は積極的に受けましたか」という質問に対し、「質問も答えも積極的にした」と「指名された時だけ発言した」という2つの選択肢を用意したところ、前者を選んだ高校生は26.1%であったのに対し、短大生は33.3%であった。また、相手の言うことが理解できなかった時や、自分の意思がうまく伝わらなかった時の対処の仕方について質問したところ、大きな差異は見られなかった。これは、短大生が、外国人教師の授業に慣れているだけでなく、実際の会話場面で使用できる方略を身につけ始めているためと考えてよいであろう。

2. 英語力に対する自己評価の変化

先に述べたように、調査対象の高校生は、中学校の英語を難無く消化し、高校での一学期終了時点で、英語に自信を失っていないと考えてよい。一方、短大生は、全員が英語英文科生で、高校3年間で英語に自信をなくしている者もいるが、ほとんどは英語に対する興味を持続している。いずれにせよ、自信の強さと到達度とは必ずしも関係はない。このことを考慮に入れて検討してみる。

ホームステイ参加前に、「聞く力」に多少なりとも自信を持っていた者は、高校生で約55%、短大生で約25であった。「話す力」の場合は、高校生が30.4%、短大生が7.2%であった。「聞く力」について、研修中「常に自信が持てた」か、「だんだん自信がついた」と答えた者は、高校生が85.8%、短大生が81%であった。「話す力」については、高校生が85.9%、短大生が81%であった。参加前と研修中の数字を単純に比較することは避けなければならないが、高校生、短大生ともに、急速に自信を高めていることは明らかである。特に、短大生の「話す力」に対する自信の変化は著しい。たとえ簡単な表現であっても、実際に口に出すことによって自分の意思を伝えることが度重なれば、それが強い自信を生むものと思われる。

ホームステイ後、英語力の伸びについて尋ねたところ、「非常に、または、かなり伸びた」と考えている者は、「聞く力」の場合、高校生で60.9%、短大生で42.9%であった。「話す力」の場合、高校生で35.9%、短大生で29.1%であった。「聞く力」について多少でも伸びたと考えている者を含めると、高校生、短大生ともに、実に95%以上に上るのである。「話す力」についても、同様に高い率で向上を認めている。

以上、「聞く力」と「話す力」について、参加者が自分の英語力の向上をどのように評価しているかみてきた。「読む力」や「書く力」についても、前二者ほどではないが、伸びたという実感を持っているようである。伸び率がどれ程であっても、この実感は、その後の学習に大きな効果を及ぼすものと信じてよいと思う。

3. ホームステイ効果に対する自己評価

北川(1989)が報告している通り、多感な青年の心は、ホームステイ中に経験した異文化・異言語接触から、多くの意義ある影響を受けている。英語学習という観点からみても、受けた影響は大きい。例えば、ホームステイ前と比較して、「多少なりとも英語の勉強をよくするようになった」と思っている者は、高校生、短大生ともに、約60%であった。さらに、英語学習意欲・態度について記述を求めたところ、約半数が意欲が高まったことを認めている。学習態度を反省した、と書いた者もいた。

効果は、英語学習の面に留まらない。「ホームステイ体験から一番得たものは何か」という問いに対して記述を求めたところ、高校生の約30%、短大生の50%弱が、人間関係において積極的になったことを認めている。自我の発達を思わせる表現も、約25%の高校生と、20%弱の短大生について認められた。このように、短期間の異文化体験でありながら、参加者の受けた影響は予想以上に大きい。最後に、高校生の全員と90%の短大生が再度ホームステイを希望し、両者共約80%が留学を希望し、約90%が英語圏で暮らしてみたいと思っていることを付け加えておきたい。

2. 研修に行く前の自分の英語力に対して、どう思っていましたか。

	とても自信があった		かなりあった		多少あった		あまりなかった		全くなかった	
聞く力	2.2	0	15.2	4.8	37.0	19.1	40.2	50.0	5.4	26.2
話す力	2.2	2.4	4.4	0	23.9	4.8	54.4	61.9	15.2	31.0
読む力	4.4	0	10.9	2.4	40.2	42.9	42.4	42.9	2.2	11.9
書く力	3.3	2.4	6.5	2.4	39.1	26.2	45.7	52.4	5.4	16.7
語い力	1.1	4.8	2.2	0	28.3	9.5	54.4	57.1	14.1	28.6

3. 研修に行く前に、授業またはその予習・復習以外に、英語の各分野に、どの程度、力を入れて勉強しましたか。

	とても力を入れた		かなり入れた		多少入れた		あまり入れなかった		全く入れなかった		無回答
聞く力	7.6	4.8	19.6	16.7	38.0	45.2	29.4	21.4	5.4	11.9	0
話す力	3.3	4.8	22.8	7.1	37.0	31.0	31.5	47.6	5.4	7.1	2.4
読む力	2.2	2.4	10.9	2.4	35.9	26.2	42.4	47.6	8.7	19.1	2.4
書く力	2.2	2.4	7.6	2.4	30.4	23.8	51.1	52.4	8.7	16.7	2.4
語い力	2.2	4.8	14.1	4.8	31.5	31.0	42.4	40.5	9.8	16.7	2.4

4. 研修期間中、英語力にどの程度自信が持てましたか。

	常に自信が持てた		だんだん自信がついた		だんだん自信を失った		常に持てなかった		無回答	
聞く力	4.4	4.8	92.4	81.0	1.1	14.3	2.2	0	0	0
話す力	3.3	2.4	82.6	78.6	7.6	11.9	5.4	7.1	1.1	0
読む力	5.4	4.8	83.7	64.3	3.3	16.7	6.5	14.3	1.1	0
書く力	3.3	4.8	76.1	69.1	9.8	11.9	8.7	14.3	2.2	0
語い力	2.2	4.8	77.2	54.8	10.9	26.2	7.6	14.3	2.2	0

5. ホストファミリーと英語で話そうと心がけましたか。

- 1) 積極的に話した.....79.4 64.3
- 2) 話しかけられた時のみ話した.....15.2 31.0
- 3) できるだけ話すことを避けていた..... 0 0
- 4) その他5.4 4.8

6. ホストファミリー以外の人（町へ出た時や観光中などに）と話すようにしましたか。

- 1) 積極的に話しかけた.....43.1 31.0

ホームステイの英語力への効果 (III)

- 2) 必要なことだけ話した.....52.2 66.7
 3) できるだけ話すことを避けていた2.2 0
 4) その他2.2 2.4
7. 研修地での英語の授業の宿題はしましたか。
 1) 毎日した.....73.9 54.8
 2) 時々した.....14.1 38.1
 3) たまにした2.2 4.8
 4) しなかった6.5 2.4
 5) 無回答3.3 0
8. 授業を興味深く受けることができましたか。
 1) 非常に興味深く受けた.....48.9 33.3
 2) 多少興味深く受けた.....46.7 54.8
 3) あまり興味深く受けることができなかった4.4 9.5
 4) 全く興味深く受けることができなかった.....0 2.4
9. 授業中、次の英語の力を使用する機会は、多くありましたか。

	非常に多い		かなり多い		少ない		全くない		無回答	
聞く機会	69.6	52.4	26.1	38.1	4.4	7.1	0	2.4	0	0
話す機会	25.0	14.3	46.7	40.5	26.1	42.9	1.1	0	1.1	2.4
読む機会	8.7	7.1	44.6	23.8	43.5	66.7	2.2	2.4	1.1	0
書く機会	8.7	7.1	44.6	38.1	42.4	52.4	3.3	2.4	1.1	0

10. 授業で使用したテキストは、難しかったですか。
 1) 非常に難しかった4.4 0
 2) かなり難しかった4.4 4.8
 3) 多少難しかった.....35.9 28.6
 4) あまり難しくなかった.....41.3 45.2
 5) 全く難しくなかった7.6 21.4
 6) テキストは使用しなかった6.5 0

11. 研修期間中、英語力にどの程度、困難を感じましたか。

	非常に困難		かなり		少し		あまり		全く困難なし		無回答	
聞く力	4.4	14.3	26.1	38.1	46.7	28.6	21.7	14.3	1.1	4.8	0	0
話す力	12.0	21.4	37.0	47.6	35.9	21.4	14.1	9.5	1.1	0	0	0
読む力	2.2	2.4	16.3	9.5	44.6	50.0	31.5	38.1	4.4	0	1.1	0
書く力	2.2	2.4	12.0	7.1	42.4	45.2	39.1	40.5	4.4	4.8	0	0
語い力	10.9	16.7	37.0	31.0	34.8	35.7	16.3	14.3	1.1	2.4	0	0

12. 授業で習った表現を、ホームステイしている家庭で使うことがよくありましたか。

- 1) よくあった.....27.2 21.4
- 2) ときどきあった.....46.7 38.1
- 3) あまりなかった.....19.6 38.1
- 4) 全くなかった5.4 2.4
- 5) 無回答1.1 0

13. 研修期間中、英語の力不足が原因で、何か問題が起きましたか。

- 1) 起こらなかった.....76.1 76.2
- 2) 起こった.....22.8 23.8
- 3) 無回答1.1 0

14. ホームステイ体験は、英語を学習する上で、役に立ったと思いますか。

- 1) 非常に役に立った.....50.0 40.5
- 2) かなり役に立った.....30.4 42.9
- 3) 多少役に立った.....17.4 14.3
- 4) あまり役に立たなかった2.2 2.4
- 5) 全く役に立たなかった0 0

15. 自分の英語力について、帰国後、どの分野の力がどのくらい伸びたと思いますか。

、	非常に伸びた		かなり伸びた		多少伸びた		あまり伸びなかった		全く伸びなかった		無回答
聞く力	15.2	11.9	45.7	31.0	35.9	54.8	3.3	0	0	0	2.4
話す力	10.9	4.8	25.0	14.3	47.8	66.7	16.3	11.9	0	0	2.4
読む力	4.4	2.4	13.0	7.1	60.9	47.6	18.5	33.3	3.3	7.1	2.4
書く力	2.2	4.8	6.5	4.8	46.7	50.0	40.2	28.6	4.4	9.5	2.4
語い力	4.4	4.8	14.1	7.1	55.4	42.9	23.9	42.9	2.2	0	2.4

16. 英語を学習する態度、意欲において、研修前と帰国後とでどのような変化がありましたか。

- 1) 英語学習意欲が高まった (学習の具体的方策を意識)13.0 23.8
- 2) 滞在した国、文化、人に対する興味が増した5.4 2.4
- 3) 英語への興味が増し、学習意欲、態度が向上した (学習の具体的方策は意識していない)40.2 21.4
- 4) 日本の英語教育に対して批判的になった2.2 4.8
- 5) 自分の英語学習態度を反省した9.8 11.9
- 6) 英語学習意欲が低下した.....0 4.8
- 7) 変化なし・無回答.....34.8 33.3